

正宗白鳥

森鷗外について

森鷗外について

一

「小説は沢山読む。新聞や雑誌を見るときは議論なんぞは見ないで、小説を読む。しかし若し何と思つて読むかと云うことを作者が知ったら、作者は憤慨するだろう。芸術品として見るのでは無い。金井君は芸術品には非常に高い要求をしているから、そこいら中にある小説は、此要求を充たすに足りない。金井君には、作者がどう云う心理的状态で書いているかと云うことが面白いのである。

る。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壮だとか云う積りで書いているものが、極めて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽の積りで書いているものが、却って悲しかったりする。」

森鷗外は、「*牟夕・セクスアリス*」（明治四十二年の作、時に、作者四十八歳）のうちにごう書いている。彼れが、当時の日本文壇の作品を、内心馬鹿にしてかかっていたことは、これによつて察せられる。

「そのうち自然主義と云うことが始まった。金井君は此の流儀の作品を見たときは、格別技癢ぎようをば感じなかつた。

その癖面白がることは非常に面白がった。面白がると同時に、金井君は妙な事を考えた。云々と、同じ小説のうちを書いてある。

日本の自然派と自称する作家どもが、みんな一様に色情狂見たいなことを書いて、「これが人生」だと云っているのを、不思議に思った彼鷗外は、ふと、「自分の性的生活の歴史を書いて見ようか」と思い立って、この異色のある「斗々・セクスアリス」の一篇を作り上げたのであった。二葉亭四迷の「平凡」も、当時の自然派作者の性慾描写に刺戟されて思い立ったものらしかった

が、しかし、「平凡」には、旧文学の臭いが附纏っていた。鷗外の古い感情から脱却した明確適切な描写とは、類を異にしていた。

全体、この「性慾史」ばかりではなくって、鷗外の後半生の小説と戯曲とは、当時の自然派に刺戟されて出現されたのであった。自然派の作品を馬鹿にしながら、「おれも書いて見よう」という創作慾を、彼れは起したのであった。彼れが前半生に試みていたいろいな近代歐洲文学の翻訳は獨歩・花袋・藤村など当時の文学青年に清新な感化を与え、旧套を脱した新文学の発生する原因の

一つとなつたのであつたが、後では、鷗外自身が、知らず識らず獨歩・花袋・藤村などの感化を受けた訳になるのである。私はそこに面白みを感じている。「芸術品に對する要求が高いために容易に取り附けなかつた」創作の筆を自由に揮つて、鷗外として文学的事業を史上に留むるようになったのは、自然派の刺戟があつたためであつた。島村抱月が歐洲に留学して学んだものよりも、日本の自然主義の氣運によつて、心の扉が開かれたと同じように、鷗外も、長年月の間に読破し來つた種々雑多な歐洲文学よりも、日本の若輩の、彼れの目からは浮薄低

劣に思われる新文学の作風によって、自己の天分と学殖とを、芸術の方へ傾瀉すべき戸口を見つけたのであった。それが、「遊び」気分であつたにしろ、馬琴の所謂「有用な書物の購求費のために書かれた無用な文」であつたにしろ、私などは、後半生の創作に於て、鷗外に重きを置くようになった。『現代日本文学全集』中の鷗外集が、初期の数種の短篇小説の外は、翻訳ばかりで埋められるようだったら、いかばかり淋しいことであろうか。私は、彼れの学殖の深さ浅さはよく知らないし、またそんなことはどちらでもいいと思つている。しかし、その

創作は、読みつづけると、滔々として尽きざる興味が覚えられる。私は人生の事と文学の事について、彼れの作品から学ぶところが少なくない。

二

私は、年少の頃「國民之友」で読んだ「舞姫」と、「水沫集」で読んだ「文づかひ」と「うたかたの記」とを、久し振りで読直した。そして、わが生の若かりし夢を偲んだのであった。今読んでも、好短篇として翫賞し得ら

れるものである。「わたくしは少年の時、貸本屋の本を
耽読した。……読本、書本、人情本……そういう本を讀
み尽くして、さて貸本屋に、何かまだ讀まない本は無い
かと問うと、貸本屋は随筆類を推薦する。……わたくし
は貸本文学卒業者になった」（「細木香以」のうち）
と、自ら云っているほど、江戸文学に熟通していたのに
関わらず、逍遙・露伴・紅葉その他同時代の他の多くの
作家のように、旧幕時代の古い文学に感染されていなか
った。

これ等の三篇は、いずれも歐洲留学記念の作品である。

若かった鷗外は、異郷の土地と人とを題材として、自己の青春の夢を語っているのであるが、これを、紅葉が、「三人妻」や「伽羅枕」などに、江戸情調の遊女妓女を憧憬し空想して、自己の青春の夢を語っているのに比べると、若い夢のさまざまが思い出されて面白い。かの三つの小説は、歐洲近代の短篇小説の体裁を模したものだが、当時の青年作家たる鷗外の心臓がそこに鼓動しているのである。島崎藤村の抒情詩「若菜集」などと同じように取扱われるべきものである。詩趣情味が豊かである。それに気品も添っている。後年の史伝的小説が学究の考証記事

のよゝうな無味乾燥に墮さなかつた所以である。「即興詩人」のよゝうな翻訳以上の翻訳が現われた所以である。「エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を濺いだ豊太郎」（「舞姫」）の心を作者の心としていた鷗外は、アヌンチャタとアントニオの薄倅な恋物語にも心を捉えられたに違ひなかつた。「涙は読むに随いて流れ、わが心の限りの涙と化して融け去るを覚えたり」とは、アヌンチャタの最後の手紙を読んだ時の、アントニオの心を叙したばかりではなく、訳者や読者の心も述べられているよゝうに思われる。

若い男女の恋を描いて、情景兼ね具わった小説は、明治以来「即興詩人」に及ぶものはなかった。私は三たびこの物語を読んだ。最初は「しがらみ草紙」「めざまし草」などに断続的に掲げられたのを、上野の図書館に保存された古雑誌の綴込みを捜して止切れ止切れに読み、その後、春陽堂出版の四号活字の二冊本によって、首尾を通じて読んだ。私は二十代に読んだ翻訳文学で、最も忘れ難い印象を留めているものは、この「即興詩人」と、小金井きみ子女史の「浴泉記」とである。私は過去を追懐して、数年前に、新刊の縮刷本を買って、「即興詩人」

の第三回目目の復習を試みたのであったが、私は自分の心がもはや作中の男女の心から遠く離れているのを感じない訳に行かなかつた。

作者たる鷗外も「即興詩人」あたりを打留めとして、青春の夢から醒めて、心は枯淡になりかかつた。現実世界の真相を見る目も冴えて来たのであつた。「埋木」「浮世の波」「悪因縁」など、「水沫集」に収められた前期の翻訳と、「一幕物」その他の後期の翻訳とを比べると、訳文の調子が変わっているばかりでなく、原作の選択が異っている。鷗外も以前は感傷的分子に富んだ物語を訳す

ることを好んでいた。彼れが若し、もっと早く、「セクスアリス」を書いていたら、ああまで情熱を欠いた科学的態度を持してのみ、筆を執らなかつたであらう。

「世間の人は今の自分を見て、金井は年を取って情熱が無くなったと云う。しかし、これは年を取ったためでは無い。自分は少年の時から、余りに自分を知り抜いていたので、その悟性が情熱を萌芽のうち、枯らしてしまつたのである。……或は結婚もしなかつた方がよかつたかも知れない。どうも自分は人並はずれの冷淡の男であるら

しい」と、作者は「キタ・セクスアリス」の結末に於て自己を省みて、一先ずこう云っている。しかし、忽ち又考え直して「……自分の悟性が情熱を枯らしたようなのは、表面だけのことである。永遠の氷に掩われている地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えている。……自分は無能力では無い。インポテントでは無い。世間の人には性慾の虎を放し飼いにして、どうかすると、其背に乗って、滅亡の谷に墜ちる。自分は性慾の虎を馴らして抑えている。羅漢に跋陀羅と云うのがある。馴れた虎を傍に寝かして置いている。童子がその虎を怖れている。

あの虎は性慾の象徴かも知れない。唯馴らしてあるだけで、虎の怖るべき威は衰えていないのである」と云っている。

性慾については兎に角、芸術に於ては、鷗外の意気は晩年まで衰えなかった。その悟性も学殖も、彼れの芸術を培養こそすれ、萎縮させることはなかった。

彼れは、無論天才型の作家ではなかった。しかし、詩作は片手間の仕事で「遊び」気分で筆を執ったことも多かったのである。非凡な作品、深刻な芸術は彼れの全集のうちから捜し出せないかも知れない。……しかし、

近年の私は、明治以来の種々雑多の作品のうちでは、鷗外の作品を最も愛読している。その文章の的確明快なのを好んでいる。蕪雜の痕のないのを、読みながら快く感じてゐる。作品を通して窺われる作家の心境に何となく親しみを覚えてゐる。何よりも鈍昧なところのないのが氣持がいい。

三

端的に鷗外の晩年の心境の露出されている小品「妄想」

については、私はかつて感想を述べたことがある。「高瀬舟」は、他に託して作者の心境を述べたもので、渾然たる佳篇である。作意の晦渋を厭うていたこの作者は、自作自註の態度を取って、いろいろな小説に、屢々説明語を添えて、読者の理解を助けるように努めているが、それが却って、鑑賞を不純にして、作品の幅を狭くすることもある。「高瀬舟」にも、この作の狙いどころの説明が添加されている。「財産というものの観念」と「死に掛っていて死なれずに苦しんでいる人を、死なせて遣ること」との、二つの大きな問題が、この物語の中に含

まれていることを自から指摘している。しかし、この所謂二大問題なるものが、作者によって解決されているのではない。そして、私などは、問題を別にして、この小説に興味を覚えるのである。場面と人物と心理とが、寸分の隙のないように描出されている。澄み切った晩秋の月夜を見るような気がする。

私は、鷗外晩年の作品では「高瀬舟」と「妄想」とを最も好んで、これまでに幾度も読み返していた。「妄想」は、最も聡明であった一人の日本人の人生観として敬聴して、自省の資としていたのであるが、それとともに鷗

外の作品解釈の鍵ともしていたのであった。

私はこの二篇と「じいさん、ばあさん」とを好んでいた。「金毘羅」と「蛇」と「雁」とは、今度「現代日本文学全集」本によつて、はじめて読んだのだが、こういう小説に徴しても、作者の聡明な頭脳と明確な描写力が認め得られるのである。鷗外は、ポオの怪奇小説の一つである「モルグ街の殺人」を、「病院横丁の殺人犯」と改題して、巧みに翻訳している。その訳文には「ポオの推理的叙説は、今の日本文壇の好みに適しないから抄略する」という意味の添書きがしてあったと、私は記憶し

ている。ポオの推理は微細を極めていて「黄金蟲」の如きは、その点で古今に類を絶した驚歎すべき作物であるが、それほど傑れた頭脳を有っていたポオも、一面、神秘不可思議な人生と宇宙とに戦っていたのであった。しかし、鷗外は、推理に傑れた頭脳は有っていても、神秘的な世界に分入って彷徨することはなかった。彼れは「有りのまま」の世界を見極めるだけに満足して、人智で分りもしない世界に歩を進めようとはしなかった。「人生宇宙の不思議に驚きたい」のが國木田獨歩の願いであったが、聡明なる鷗外は、そういう願うて甲斐なき願いに

心を悩まさなかつた。十九世紀の終りに独逸に留学して
いた彼れは、歐洲の世紀末の思潮と文芸に接触した最初
の日本文学者であつた訳であるが、その思潮に感染しな
かつた。ハルトマンの厭世哲学を理解しても、そういう
哲学に心酔し惑溺しなかつた。

日本流の自然派文学の「有りのまま」主義を標準とし
て批判すれば、鷗外晩年の作品の多くはその標準にかな
っているのではあるまいか。

「金毘羅」と「心中」と「蛇」は、題材に神秘らしい影
が付き纏っているのだが、作者は、それを明るみに持出

して、暗い影を残さなかつた。愛慾の人情を描いた「雁」を讀んで、ことにそう思う。この可成り長い小説は、男女の色情についても、鷗外の目のよく働いて、理解の行届いていたことを証明するものであるが、人情愛慾の不思議さについても、作者はそこに曖昧模糊の痕を残していない。主人公末造にしても、その女房にしても、若い妾とその父親にしても、彼等の悲喜哀歡のもつれが、明かに秩序整然と説かれている。底の知れない悩みが作品のうちに出没しているのではない……トルストイやドストエフスキーの文学と、わが森鷗外の文学との相違して

いる所以である。

「小説は説明をしてはならないのだそうだが、自惚は誰れにでもあるもので、此の話でも万一ヨオロッパのどの国かの語に翻訳せられて、世界の文学の仲間入をするような事があつた時、余所の読者に分らないだらうかと、作者は途方もない考えを出して、行きなり説明を以て此小説を書きはじめる」（「百物語」）と、当時の雑評家を擲揄しているように、わざと堅くるしい説明語を用いているところもあって、「雁」のような人情小説に於てさえ、時々学者くさい筆法が散見して、読者の素直な鑑賞

を妨げるところもあるが、描写の才能がないために、説明語を用いているのではない。この小説の舞台になつてゐる本郷から下谷へかけての風物、明治初期の時代の空気は、読者の目に映るようによく描かれている。松源での妾の目見えの場面でも、決して説明で逃げようとはしないで、描写で委曲を尽している。描写の巧みな作家は、日本にはあまりなかつたので、小説家らしい小説家の作品よりも、有島武郎の「或る女」や鷗外の「雁」などに、却つてしつかりした描写の見られるのを私は不思議に思つている。

夏目漱石は芸術家として、鷗外よりも豊かな天分を有っていたに違いないが、私には漱石の作品はいつもくどい感じがする。

四

私は「書生氣質」以来の、明治の重なる小説は、一通り見ている訳であるが、自己の天分を完成した作家としては、鷗外が第一であったと思う。明治の重なる作家は、早世したためでもあったが、充分に自己を發揮し得なかつ

た。独り鷗外は「舞姫」から「北條霞亭」まで、青年期から晩年まで、芸術を楽しんで、天分と修養とを兼ね具えた自己相当の文学に安んじて、終りを全うした幸福な文学者である。終りまで老衰の痕を残さなかつた。

罪人を護送しながらその話に聞惚れている同心庄兵衛の軽い懷疑の気持は、つねに鷗外の心にも存していたのであつたが、懷疑のために七顛八倒することの愚かさを知っていた彼れは、一生心の平静を失わなかつた。「日、の要求に安んぜない権利を持つているものは、恐らくは只天才ばかりであろう。自然科学で大発明をするとか、

哲学や芸術で大きい思想、大きい作品を生み出すとかいう境地に立ったら、自分も現在に満足したのではあるまいか。自分にはそれが出来なかつた。」（「妄想」）と云っている通り、古今東西の偉大なる作品に熟通していた彼れは、日本現代の文学者に有勝ちな誇大妄想的己惚れも起さず、また、聡明であつた彼れは「辻に立っていて、度々帽子を脱いだ。昔の人にも今の人にも敬意を表すべき人が大勢あつたのである。帽子を脱いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行こうとは思わなかつた」（「妄想」）ので、一人の人間や一つの主義に雷同して狂奔す

ることはなかった。そして「死の恐怖が無いと同時に死の憧憬も無い。死を怖れもせず、死にあこがれもせず、人生の下り坂を下って行った」という。晩年に到着した彼れの平静な心境を、私は羨ましく思っている。

私は、直接に鷗外に会ったことはなかった。また会いたいと思ったこともなかった。ただ、私が森川町に下宿して新聞社へ通っていた時分に、電車の中で、カーキ色の軍服を着けた、額の少し禿げかかった男が、私の前に腰掛けて、小形の洋書を開けて読んでいるのを見て「この人が鷗外なんだな。よく見ると、何処か、三木竹二さ

んに似ているから、そうに違いない」と思ったことがあった。それから「ホトトギス社」に招待されて、能楽を観に行った時に、席を隔ててその姿を見たことがあった。

演劇を鑑賞するには、舞台外の俳優に接する必要がないと同様に、文学を鑑賞するには、作家に会う必要はないのである。私は目のあたり鷗外に接して教えを受けなかったことを遺憾とはしていない。

前半生には、批評の筆を執って盛んに論戦していた彼れも、後半生に於ては、彼れ自身半ば侮蔑していたらしい自然派の作品や評論に対して、表立った論争はしなかつた。

った。しかし、自作に対する後進の種々雑多な悪評を冷眼視はしなかった。他の大家のように黙ってすましてはいなかった。短篇集「分身」に収められている「不思議な鏡」や「田楽豆腐」、文学全集の「遊び」などは、小説というよりも、当時の文壇の批評であり、自作に対する弁護文であるが、これらを読むと、雑多紛々の世評などは、実質的に何の力もないもので、傑れたる作品は、自分の持っている力によって、存在を続けて行くことが分るのである。

「創作のなかに自己告白をしない」「告白しない自己を

有していないから遊びの文芸だ」「情熱のない作だ」というのが、彼れの作品に対する重なる非難であって、私なども以前そう思っていたが、しかし数十年間の鷗外の作品を通覧すると、その一生の自己が、自己告白を目標とした作家の作品に劣らないほどに現われているのを、私はこの頃感じている。

五

文学とは何ぞ？

私は年少の頃、内田魯庵の「文学一斑」を読んで、文学というものの理論的概念を注入されて以来、今日まで、文学の分類や価値批判や、その他さまざまな理論について、絶えず聞かされて来た。「文学とはかくの如きものなり」「かくあらざるべからず」との理窟を、三十年來聞かされ続けて来たのであった。この頃でも、月々日々文学論の絶える時はないので、我々文筆を職業としているものは、そういう議論に全然無関心ではいられない訳であるが、「人生とは何ぞや」の問題が永久に分り切らない如く、「文学とは何ぞや」の問題も永久に解決され

ないように思われる。

畢竟わが好むところに従う外はないのである。

理論は兎に角、明治以来の代表的作家の重要な作品を殆んど読み尽している私は、どういふ作家のものに心酔し、「これこそ文学だ」という感じに打たれて来たのであろうかと回顧すると、可成り多くを数え上げることが出来るのであるが、しかし、そういうものも、今日手に取って見ると、大抵色の褪せたものとして、私の目に映るようになっていた。色彩の絢爛なものも、簡潔直截なものも、明るいものも、暗いものも、そこに、作者自身

の一所懸命になったところは認められても、私自身読みながら感激さされることは稀れになった。そこへ行くと、森鷗外の作品は見ざめがしない、天才らしい強烈な芸術の匂いがないかわりに、鈍昧な痕を留めていないのがい。明治以来の日本には、大なる天才は現われなかった。われわれを渦の中に卷込むような作家はなかった。せめて、聡明なる人鷗外の語るところを、私は耳を澄まして聴くことを喜んでゐる。

日本文学電子図書館

森鷗外について

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館